



ストレスフリーな牛づくりで肉質部門日本一！

ちには『楽しみながらやりなさい』と声をかけています。一番は生徒たちの成長と自信に繋がることです。もし負けたとしてもいい経験になると思います。そこで勝てればさらにいいですね」と語った。

牛を通じて成長していく

意外だったのが、曾於高校の畜産食農科に入学する生徒のほとんどが非農家出身ということ。昨年の3年生も農家出身の生徒は2人（酪農と露地野菜）だけだったそうで、現在の3年生にも肉用牛経営をメインで行っている農家の後継者はいないという。しかし、生徒たちは牛を非常に可愛がり、在学中に牛に目覚める生徒も多いそう。さらに、畜産地帯であることから牧場や食肉工場など畜産関係の就職先も非常に充実しているため、畜産関係の就職先を選ぶ生徒も多いそうだ。県内の牧場に就職したという生徒は、自分の名前がついた牛「里菜介」号を非常に可愛がり、自らが引き手をしたいという強い希望で、予定を変更して子牛市場への出荷を夏休みに延期したこと。「セリが終わったら泣いちゃって。生徒もそのくらい強い思い入れを持って世話をしてくれています」とのことだった。



また、次回の和牛甲子園に出品予定と紹介した竹諒号と隼人号の由来となっている生徒たちは、太田先生曰く「非常に牛好きな男たち」だそうで、2人とも県内の農業大学校に進学して畜産を学んでいるそうだ。

今年の春に卒業し地元のJAお鹿児島に就職した生徒が、子牛市場で立派に働いていたのを見かけたそうで、「この前まで学生服を着ていたのに、博労服を着て牛の誘導などをしていました。指導員という立場で、これから大変だろうと心配になりますが、みんなそれぞれ頑張って立派に仕事をしている姿を見て頼もしい気持ちになりました」と太田先生も感慨深げだった。

和牛甲子園での最優秀賞に続き、現在は全共の代表入りに向けてひたむきに頑張っている曾於高校。こうしたイベントへの参加について太田先生は「鹿児島黒牛を全国の方に知ってもらって、鹿児島を盛り上げていきたいと思っています。また、こうしたイベントに挑戦することによって、生徒たちが牛を通して、社会人として生きていくスキルなり自信なりを付けられる貴重な機会です。勉強やスポーツとはまた違いますが、牛を育てることにこれだけ一生懸命になれるることは素晴らしいことだと思います」とその意義について語った。
(庄 萌)